2015年12月13日中原教会メッセージ

聖書箇所：第二列王記第20:1-11

　　　　　　　　　　　　　　**「ヒゼキヤの病」**

　お読みいただきました第二列王記20:1-11はユダヤの王ヒゼキヤが病気になり、預言者イザヤによって癒された記事です。最初に「そのころ」とありますが直訳すると「これらの日々に」ということですが、まず、「これらの日々」とはどのような時であったのか知る必要があります。尚、この言葉は12節にも繰り返されており、バビロン王メロダク・バルアダンが来た時の物語も「これらの日々」に起きたことだと言われています。これらのことがらの背景は18章からスタートしています。

　18:1には「ユダの王アハズの子ヒゼキヤが王となった」とあります。アハズというのはユダ王国12代の王で、偶像礼拝で有名な王であり、列王記記者および歴代誌記者から強烈な批判を浴びています。ヒゼキヤはこの子ですが父親と異なり、イスラエルの伝統的なヤハヴェへの信仰に立ち帰ります。ヒゼキヤは父アハズの共同統治者としてその王としての統治を開始します。BC729年のことです。それは北王国イスラエルの最後の王ホセアの第三年と記されています。ヒゼキヤの宗教改革は「ヒゼキヤ改革」と称せられます。18章3節からお読みします。「3 彼はすべて父祖ダビデが行ったとおりに、主の目にかなうことを行った。 4 彼は高き所を取り除き、石の柱を打ちこわし、アシェラ像を切り倒し、モーセの作った青銅の蛇を打ち砕いた。そのころまでイスラエル人は、これに香をたいていたからである。これはネフシュタンと呼ばれていた。 5 彼はイスラエルの神、主に信頼していた。彼のあとにも彼の先にも、ユダの王たちの中で、彼ほどの者はだれもいなかった。 6 彼は主に堅くすがって離れることなく、主がモーセに命じられた命令を守った。 7 主は彼とともにおられた。彼はどこへ出陣しても勝利を収めた。彼はアッシリヤの王に反逆し、彼に仕えなかった。 8 彼はペリシテ人を打ってガザにまで至り、見張りのやぐらから城壁のある町に至るその領土を打ち破った」とあります。ダビデの伝統に立ちカナンの地場信仰であるアシェラ信仰をやめた、と書かれています。5節では「彼はイスラエルの神、主に信頼していた。彼のあとにも彼の先にも、ユダの王たちの中で、彼ほどの者はだれもいなかった」とされており、絶賛といっても良いでしょう。南北両王国の王の中で絶賛されているのはヒゼキヤとその三代あとのヨシヤ王ですが表現から見るとヒゼキヤの方がより賞賛されています。ヨシヤ王というのは「律法遵守」のユダヤ教の基本を作った王でその宗教政策は「ヨシヤ改革」と言われています。その王の時に「申命記」が再発見されたので有名でもあります。ヒゼキヤ改革については、7節で「主はかれとともにおられた」と記されています。これは「インマヌエル」です。マタイ1:23に「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」（訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。）」と書いていますが同じ意味です。注意をしなければならないのはアッシリアに対する態度です。父アハズはアッシリアの従属国の立場に甘んじて居ました。ところがヒゼキヤは「アッシリヤの王に反逆した」と言っています。

　次の9節から12節までは北王国の話です。「9 ヒゼキヤ王の第四年、すなわち、イスラエルの王エラの子ホセアの第七年に、アッシリヤの王シャルマヌエセルがサマリヤに攻め上って、包囲し、 10 三年の後、これを攻め取った。つまり、ヒゼキヤの第六年、イスラエルの王ホセアの第九年に、サマリヤは攻め取られた。11 アッシリヤの王はイスラエル人をアッシリヤに捕らえ移し、彼らをハラフと、ハボル、すなわちゴザンの川のほとり、メディヤの町々に連れて行った。12 これは、彼らが彼らの神、主の御声に聞き従わず、その契約を破り、主のしもべモーセが命じたすべてのことに聞き従わず、これを行わなかったからである」と記されています。ホセア王第九年BC721年にサマリヤは攻め取られ北王国はここで滅亡します。ヒゼキヤはまだ父アハズと共同統治のときであり、アッシリアの属国の立場を維持していたため、アッシリアに滅ぼされることは“なし”で済みました。しかし、ヒゼキヤは密かにアッシリヤへの反抗の時をねらっていたようです。これに対し、BC715年にはアッシリア王セナケリブはユダの町をも占領しエルサレムも風前のともしび、となりました。ヒゼキヤは「私は罪を犯しました。私のところから引き揚げてください。あなたが私に課せられるものは何でも負いますから。」と言い、宝物蔵のすべての銀、本堂の金等を差出し、なんとかエルサレム陥落は逃れました。

　更にアッシリア王は大軍をエルサレムに送りました。その代表格の将軍ラブ・シャケはユダの兵士、住民に降伏を呼びかけます。「ヒゼキヤにごまかされるな」と言います。また、イスラエルの主ヤハヴェはアッシリアの王に対し、ユダに攻めのぼって、これを滅ぼせ、と言ったと告げます。ユダ王国の家臣エルヤキム、シェブナ、ヨアフなどはこれを聞き、悲しみと怒りで自分たちの衣を裂いて、ヒゼキヤの元に行き、この言葉を伝えます。ヒゼキヤはこの屈辱的言葉を聞き、悲しみと怒りをもって、部下たちを預言者イザヤのもとに送ります。イザヤは言います。「6 「あなたがたの主君にこう言いなさい。 主はこう仰せられる。『あなたが聞いたあのことば、アッシリヤの王の若い者たちがわたしを冒涜したあのことばを恐れるな。 7 今、わたしは彼のうちに一つの霊を入れる。彼は、あるうわさを聞いて、自分の国に引き揚げる。わたしは、その国で彼を剣で倒す。』。」すると「ラブ・シャケは退いて、リブナを攻めていたアッシリヤの王と落ち合った。王がラキシュから移動したことを聞いたからである」と書かれています。リブナはペリシテとユダの境にある町と見られているので、この時アッシリア王はペリシテを攻略しようとしていたのでしょう。ラブ・シャケは、リブナを攻めていたセナケリブと落ち合って、アッシリア軍は一時退却をします。クシュ即ちエチオピアの王ティルハカがセナケリブと戦うために出てきている、と言われていますので、クシュの王がアッシリア軍を攻撃しようとしていたため一時退却をしたのであろうと思われます。当時、エジプトはエチオピア王朝の統治下にありましたから、クシュの王とはエジプトの王のことです。おそらくヒゼキヤはエジプトに助けを求めたのであろう、と思われます。当時、アッシリアとエジプトが二大強国ですから、結局ヒゼキヤも大国エジプトを頼りにしていたのです。このような大国を頼りにする態度は「主なる神」のみに信頼を置き、独立を維持しようとするイザヤの考えとは異にします。

　このあとアッシリア王セナケリブは再度エルサレムの攻撃に来ます。この戦闘はアッシリアの遺跡でも確認されておりBC701年のことです。セナケリブの使者はヒゼキヤの神はユダ民族を守らない、ということを告げます。今までいろんな町の神と人々を滅ぼしてきたことをあげます。ヒゼキヤはこの手紙を「主なる神」に示し、祈ります。「私たちの神、主よ、どうか今、私たちを彼の手から救ってください」と切なる祈りを奉げます。預言者イザヤはヒゼキヤに主の言葉を与えます。最終的にイザヤは言います。「32 それゆえ、アッシリヤの王について、 主はこう仰せられる。 彼はこの町に侵入しない。 また、ここに矢を放たず、 これに盾をもって迫らず、 塁を築いてこれを攻めることもない。33 彼はもと来た道から引き返し、 この町には入らない。 －－主の御告げだ－－34 わたしはこの町を守って、これを救おう。 わたしのために、 わたしのしもべダビデのために」。そして「35 その夜、主の使いが出て行って、アッシリヤの陣営で、十八万五千人を打ち殺した。人々が翌朝早く起きて見ると、なんと、彼らはみな、死体となっていた。36 アッシリヤの王セナケリブは立ち去り、帰ってニネベに住んだ」とあります。ニネベはアッシリアの首都です。「主の使い」が敵を敗北させたというのです。エジプト軍というようなものではなく、「主の使い」新約の言葉で言えば天使がアッシリア軍をやつけたのです。そしてセナケリブは息子二人に殺されその息子たちは逃亡し他の子どものエサル・ハドンが王となりました。強大な勢力を誇ったアッシリアも次の代のアシュルバニパルで最後を迎えます。

　そして本日の聖書箇所20章になります。まず、「そのころ」とありますがいつの出来事でしょう。内容的に考えて先程の歴史の中で、第一次のセナケリブの攻撃と第二次の攻撃の間、というのが一番説得性があります。エジプトの軍が来たと言うので、セナケリブの軍は一時的に退却し、次の本格攻勢を狙っている時期です。極めて緊迫した情勢です。そこで指導者たるヒゼキヤ王が病気になり、預言者イザヤから「主はこう仰せられます。『あなたの家を整理せよ。あなたは死ぬ。直らない。』」と言われてしまうのです。「家を整理する」というのは跡継ぎを決め、死ぬ用意をしろ、ということです。ヒゼキヤがエジプトを頼りにしたことから、主なる神への忠実さに疑いが掛けられ、神様がヒゼキヤとユダの民を試みることになったのだと思います。同様の出来事を記述している第二歴代誌32:25では「25 ところが、ヒゼキヤは、自分に与えられた恵みにしたがって報いようとせず、かえってその心を高ぶらせた。そこで、彼の上に、また、ユダとエルサレムの上に御怒りが下った」と言われており、信仰者としての謙虚さを失っていたことが示唆されています。しかし、ヒゼキヤが絶望のなかで、「顔を壁に向けて、主に祈って」言っているのは本物です。現在、イスラエルには「嘆きの壁」というのがあって、そこで多くのユダヤ人が、自分たちの過去を嘆きつつ、神に賭ける希望を祈る場になっていますが、エゼキエルの祈りもそのような絶望の中で神に希望を掛ける祈りであったのでしょう。3節では「ああ、主よ。どうか思い出してください。私が、まことを尽くし、全き心をもって、あなたの御前に歩み、あなたがよいと見られることを行ってきたことを。」こうして、ヒゼキヤは大声で泣いた」と記されています。真剣な、命を懸けて神様に願い求める祈りです。この「思い出して下さい」という表現は、本当に真剣に神様に願い求める時につかわれる言葉です。詩篇132:1をお読みいたします。「ダビデのために、 彼のすべての苦しみを思い出してください」。哀歌5:1をお読みします。「主よ。私たちに起こったことを思い出してください。 私たちのそしりに目を留めてください。 顧みてください」。新約ではルカ23:42に出てきます。十字架上で例の盗賊が言った言葉です。「そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。」43 イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます」。真剣な、全霊をこめた祈りです。ついに、第二歴代誌32:26も「しかしヒゼキヤが、その心の高ぶりを捨ててへりくだり、彼およびエルサレムの住民もそうしたので、主の怒りは、ヒゼキヤの時代には彼らの上に臨まなかった」と言っています。へりくだって祈る姿勢が神様の試みに正しく答えたことになったのです。第二列王記でもイザヤに主の言葉が臨み「『わたしはあなたの祈りを聞いた。あなたの涙も見た。見よ。わたしはあなたをいやす。三日目には、あなたは主の宮に上る。6 わたしは、あなたの寿命にもう十五年を加えよう。わたしはアッシリヤの王の手から、あなたとこの町を救い出し、わたしのために、また、わたしのしもべダビデのためにこの町を守る。』」 と言われます。ヒゼキヤの涙が神様に通じたのです。15年の命を頂きます。

　またイザヤが干しいちじくによってヒゼキヤの腫物をなおします。この腫物は主の宮に入るのがはばかられる種類の病気だったようなので、昔は癩病と訳されていたツアラトだったのかもしれません。膚に白い鱗が出てくる皮膚病です。これが治癒されるという保証としての徴（しるし）というのが示されます。日時計の影が十度戻される、というのです。日時計は影で時間をみる道具ですが、十度、直訳しますと十ステップです。階段状になっていて、どの段のところは何時、というように見る日時計だったようです。15年命を長らえたのに対応し、時間を過去に戻してくれた、という意味でしょう。この記事が書かれているイザヤ書の38:8では「8 見よ。わたしは、アハズの日時計におりた時計の影を、十度あとに戻す。」すると、日時計におりた日が十度戻った」と書かれています。第二歴代誌にはこのことは書かれていません。神様が時間に介入したとされる箇所がもう一か所あります。ヨシュアがエモリ人と戦った箇所でヨシュア記10:13です。「13 民がその敵に復讐するまで、 日は動かず、月はとどまった。 これは、ヤシャルの書にしるされているではないか。こうして、日は天のまなかにとどまって、まる一日ほど出て来ることを急がなかった」とありここでは、半日、時間が止まったようです。より根本的に旧約聖書における時間とはどのように描かれているのでしょうか。時間も神様の被造物ですから、神の国や信仰の世界では時間は単純に直線を流れるものではありません。過去は「記憶を呼び起こされる」ことにより現在化します。過越し祭がその代表的なものです。また将来の希望についてはそれが神様の約束であれば、現実となることが確実であるのですから、現在既にあることと同じことになります。このように信仰の世界では過去が現在化し、将来が現在化するのです。これが神の国は時間を超越している、ということの意味です。もちろん、直線的時間が描写されている箇所もありますので、これらが錯綜しているのが聖書の世界です。

　20章12節以降にもう一つの物語があります。バビロニアの王メロダク・バルアダンがヒゼキヤの病気見舞いに来た時、ヒゼキヤはすべてを許し見せた所イザヤに叱責される記事がでてきます。そしてユダはバビロニアに滅ぼされる、という預言が語られます。事実、約100年後ユダ王国はバビロニア王ネブカドネザルにより滅ぼされてしまうのです。ここで注目したいのは、歴史的事柄ではなく、これを告げられた時のヒゼキヤの信仰的態度です。16節以下でイザヤは「16 する「主のことばを聞きなさい。 17 見よ。あなたの家にある物、あなたの先祖たちが今日まで、たくわえてきた物がすべて、バビロンへ運び去られる日が来ている。何一つ残されまい、と主は仰せられます。18 また、あなたの生む、あなた自身の息子たちのうち、捕らえられてバビロンの王の宮殿で宦官となる者があろう。」と告げます。これに対し、ヒゼキヤは「あなたが告げてくれた主のことばはありがたい。」 と言い、列王記記者はこれを解釈して「彼は、自分が生きている間は、平和で安全ではなかろうか、と思ったからである」と言っています。大変誤解をうみやすい訳です。当時の考え方では子孫の不幸は自分の不幸と同一であり、自分の代は問題ないのでよかった、というような理解はありえません。直訳すると、「あなたの話された主の言葉は良きことです。もし、我が日に平和と安全が成るとすれば。そうでなく主が言われても」となります。すべてを主に委ねているのです。「良きこと」というのはヘブル語でトーブという形容詞ですが「すべて良し」と言う時の「良し」です。神様のなされることはすべて良し、という信仰表現なのです。すべてを受け入れる、という信仰的態度なのです。

　ヒゼキヤ王が歴史の中で示したことを通してイスラエルの信仰を見てきました。主なる神に信頼し、すべてを委ね、すべてを受け入れるという謙虚な態度が信仰の神髄だということが示されています。エジプトを頼りにするような迷いもあります。しかし、真実な熱心な真剣な祈りに主なる神は答えてくださいます。私たちの場合は確実な仲保者が共に居てくださいます。インマヌエル。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日の集まりをありがとうございます。主の降臨を待ち望む週です。ヒゼキヤの信仰から学びました。熱心な祈りが主に聞かれ、15年を更に生きることが許されたこと、徹底的に主に委ね、南王国が滅びゕら逃れることができたことを見ました。主は過ちを犯す我々を、忍耐をもって導いて下さいます。感謝と願い、我らの救い主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン）